

佐川恭一小説集

目次

アドルムコ会全史

- 005 -

キムタク

- 151 -

パラダイス・シティ

- 171 -

夏の日のリフレイン

- 315 -

ブライアンズタイム

- 323 -

アド
ドル
ム
コ
会
全
史

高山の初任給を聞いたときおれはマジでバカらしくなった。これほどバカらしいことがあっていいのだろうか。いくらなんでもバカらしすぎるってもんである。世界中のあらゆるバカらしさを耐え忍んでいる人間も、これを聞けば自分の直面しているバカらしさの相対的なバカらしくなさに希望を見出し始めること請け合いである。つまり、クソみたいに劣悪な労働環境の工場で身を粉にしてはたらくおれの初任給が十五万円だったって言うのに、高山の野郎は八十万円もらっていたのだ。

「お前がおれの五倍はたらくってんならわかるが」

おれは強く握りしめた拳から血をしたたらせ、唇と声をおるっぶるに震わせながら言った。

「おれの方がお前の十倍はたらくてる」

すると高山は、古いトレンドィ・ドラマでイケメンがやるみたいに得意気に、こめかみを人差し指でとんとんやった。

「この違いだろ。やたらめったらはたらくだけなら、猿でもできんだよ」
そりゃそうだな、とおれは思った。

*

調子乗りの高山はおれの高校時代のクラスメイトだ。成績はいつも学年トップだったし、陸上部でもないのに百メートル走は十一秒台だったし、高校のミスターコンテストで三年連続準優勝している。それで調子に乗るなという方が無理かもしれない。

その後も高山は挫折知らずで、大学を卒業してからは超有名な外資系の証券会社ではたらし始めた。給料は異常に高いがその分仕事がつくて、すぐやめるやつが多いらしい。八人いた高山の同期は一週間で半分になり、二週間でそのまた半分になった。でも高山は余裕だ。高山が余裕を失うのを一度も見たことがない。おそらく余裕を失うという回路がこいつの中に組み込まれていないのだ。いつだってこういう反則に近いような化け物が圧倒的勝利を収め、おれのような心優しい子猫ちゃんを搾取され貧困のうちに野垂れ死んでいく。

労働時間はおれの方が高山よりも長い、何をやってるかと言えば誰でもできる系のライン工だ。周りのやつらと一緒に辛う辛う辛い辛いといわめいているが、確かに責任は風に舞い上がるビニールシートぐらい軽いし、ろくすっぽ頭を使ったこともない。

十六万円が妥当だと言われてしまえば、おれに返す言葉はない。

*

社会に出てからというもののいいとこなしのおれだが、大学にいるあいだはわりとフツツに青春していた。恋人もまったくできなかったわけじゃない。親からもらう仕送りとバイトでかせいだ金を合わせて、貧乏ながらもなんとか楽しくやっていたのだ。失敗のきつかけは大学で宗教団体を作ったことだった。大学でできた友人の久我山にそそのかされたのである。

「宗教が一番もうかるんだよ、ね？ ぼくらみたいにさ、こんな五流の大学を出て、いくら普通にがんばったってさ、もう成功なんて絶対にできないんだ、何かでっかいことしなきゃ、逆転なんてできっこないんだよ、ね？ そこでぼくはこういう宗教を考えた、物質

的にある程度豊かになったこの社会では、精神のケアが全然足りてない。知ってるかい？アメリカではほんとに、風邪薬をもらうみたいにして精神科で薬をもらうんだよ、イギリスでもそうさ、ぼくは日本もそうあるべきだと思ってる、でもまだまだ精神科に通うことには後ろ暗いものがあるだろ、ぼくはいきつけの精神科に行くとき、自分が死んだように感じる、社会から抹殺されているように感じる。日本のこの風潮はどうせしばらく変わらないさ、だからそのガス抜きとしての宗教、それがうまく作れば当たると思うんだ、ね？」

精神薬の飲み過ぎでいつもぶるぶるしていた久我山のこの言葉でおれは一念発起し、つまらない宗教を立ち上げた。哲学とか心理学とか社会学の概念なんかを意味のわからないままごちゃまぜにして放り込んだ、難解っぽいだけで内容のまったくない教典を作り上げてそのへんに配りまくると、おれたちの大学にもわずかにいた賢い層の人たちが色んな解釈をしてくれて大論争が起こった。教典の作者であるおれには凄まじい量の質問が寄せられたが、いつも「どれが正解とは言えないね」と答えるだけだった。正解もクソも、内容はめちゃくちゃなのだ。おれはそれっぽく文章を組み合わせる天才だった。そして意味深な顔で「どれが正解とは言えないね」と答える天才でもあった。

久我山の勧めで催眠術も会得した。おれの習ったのは、瞬時に相手の呼吸のリズムをつ

かみ、気付かれないようにこちらの呼吸のリズムを同調させていくことによって少しずつ相手を酩酊状態へと誘い込む、というわざだ。うまく呼吸のタイミングが合うと相手の目がとろんとしてきて、意のままに操れるようになる。文章にすると簡単そうに見えるが、これを身につけるのに一年かかったし、おれ以外には誰もできなかった。こんなわざを身につけて悪用しない人間はいない。おれはむかつくやつをかたっぱしから精神的にボロボロにして、大声で泣き出したところを即座に慰めて心酔させ、多額の寄付金を巻き上げた。かわいい女の子をひっかけては、部屋（おれの住処^{すみか}はどこにもあるワンルームの小さな部屋だったが聖地みたいになっていて、そこに招かれることは信者にとって無上の喜びだった）に連れ込んで犯しまくった。おれがフツーに暮らしているのは絶対に手の届かない女たちが、簡単に股を開いた。同じ大学の学生だけではない。高山の通っていたような一流大学の女性でさえ、この五流大学頭パーのおれに股を開きまくり、挿れてほしい挿れてほしいと泣き叫んだのだ。おれは瞬く間に有名人になり、瞬く間に逮捕された。一応は執行猶予付きですんだが、平凡な専業主婦だった母親は一躍極悪人とされ、被害者——おれはやつらを被害者だなんて思っちゃいないが——宅に土下座して回り、しまいは心臓の血管がプチ切れて死んだ。土下座しすぎて足にできた血栓が飛び、胸につまったのだ。おれは優しかった母親との思い出を振り返って一晩中泣き明かし、喪服を買って通夜に出ようと

したが、実家の玄関から出てきた父親に思いつき殴り飛ばされた。

「お前、どのツラ下げて帰ってきたんだ！」

どのツラもこのツラも、母親が死んだら誰でも帰ってくるだろうが！ おれが父親にかみかろうとすると叔父や叔母まで一緒になっておれを殴りつけ、倒れたところを思うさま踏みつけた。母方の祖父にいたってはいつもついていた杖でビシビシ顔を叩いてくるのでめちゃくちゃ痛かった。

そういう訳で、もうおれに家族はいない。

*

社内で一番かわいいと思う女の子は誰かと聞かれ、鮎川紀子ちゃんだと答えない者はいなかった。鮎川紀子ちゃんは数多くのセレブが通う一流私大を出ていて、同じ会社でもおれたちみたいなごみとは違い、企業営業部に配属されたエリートだ。入社ルートも違うし給与ももちろん違う。まさにお嬢様といった感じの清楚でお上品な整ったルックス、ハンパない透明感の白い肌、キュートさ爆発のミディアムボブ、ほとぼしる処女感。同期だけでなく全世代、誰もが彼女に◎を付けるほどグリグリの本命だった。係長も課長も部長

もめろめろだったが、聖なる鮎川紀子ちゃんは聖なりすぎてセクハラの対象にならなかった。セクハラのしすぎで有名だったものの仕事ができすぎて結局出世していた杉本部長は、後にこう語っている。

だめな女性というのは、自らの肉体に聖性を付与することに失敗し、衣服を脱ぎ捨てることで卑俗さをそのまま露呈し、男性の直接的な肉欲の対象となってしまうものである。それに対して真にすばらしい女性というのは、自らを男性の手の届かぬくらびやかな舞台上に押し上げ、衣服を脱ぎ捨てることで逆に聖なる記号をまといき、ついには男性を去勢してしまうのだ。後者の代表として、私は鮎川紀子の名を一番に挙げる――

そんな中、覇気のない死神みたいな顔で有名だった同期の岸田という男は、一年目の春に開催された同期親睦会でこうつぶやいた。

「この会社ってブスばかりだけど、鮎川さんならセックスしてやってもいいな」

この上から目線の発言が一時話題となり、飲み会の場にいなかった者にまであついう間にツイッターやらLINEやらフェイスブックやらで拡散され大炎上、怒り狂う男性

社員たちが次々に岸田を罵倒しにきた。岸田はその都度「いや、何熱くなってるんですか？」と余計な冷笑を浮かべてしまいさらにまずい状況になったのだが、いくら罵倒されても岸田の心は折れず、逆に罵倒している側が精神を病み診断書を取り付けてくるほどだった。パワハラで有名だった人間たちも相当な勢いで岸田に集中砲火を浴びせたが、岸田はまったく意に介さず「なんであんたみたいなバカが出世できたんでしょうね」「まあ出世してもこんな小さな会社じゃ意味ないですけどね」などと無意識のカウンターパンチを執拗に叩き込み、少なくとも四人のパワーハラスメンターを病院送りにした。パワハラに悩んでいた社員からすれば岸田は救世主だった。

《ややこしいやつにはややこしいやつをぶつけよ。》

おれがこの会社で学んだ教訓の一つである。

*

会社の労働組合が主催するソフトボール大会は、毎年大盛り上がりだった。これは組合活動に精を出す者の登竜门的なイベントでもあり、ソフトボール大会を成功させた者だけが組合の中でのし上がり、管理職とは違う方向へと地位を高めていくことができるのだ。

組合組織にあこがれる人間はわりと多かった。

このソフトボール大会、部門ごとにチームを組むのだが、ラインのある製造部、つまりおれや岸田の所属するチームは相当歳のいった人間ばかりで、下馬評は最悪だった。組合新聞には「このチーム、死者が出なければ良いが……笑」なんて書かれている。年寄りはもちろんのこと、おれは貧乏暮らして気力も体力もなかったし、岸田もマジで死神の愛称に恥じないほどガリガリだったから、出場を辞退させてほしいくらいだった。

ソフトボール大会の当日、ピッチャーは岸田にやってもらった。おれにピッチャーなんてとても無理だったし、ほかのじい連中にやらせたら本当に死ぬかもしれないからだ。岸田は意外にも嫌がるそぶりを見せず、ふらふらとマウンドに立った。

そこからが圧巻だった。

岸田は豪快なフォームのウインドミルで豪速球をストライクゾーンに決めまくった。ヤバイくらい決まりまくって相手チームの打者は全員ギャグ漫画みたいに派手に空振りして尻餅をついた。岸田のことを死神だとかマッチ棒だとかバカにしていたやつらがばたばた三振に倒れていくさまは、正直涙が出るほど感動的だった。しかもそれだけじゃない。岸田はふらふらとバッターボックスに立ってゆらゆらとバットを構えては、百パーセントの確率でホームランを打ったのだ。冗談抜き、誇張抜きの百パーセントである。

おれたちのチームは一点も取られず岸田のホームランで全勝、みごと優勝を果たした。すべて岸田のおかげとは言え、虐げられていた製造部が存在感を示せたことがすごくうれしかった。何もしていないじい連中もうれしそうだった。

「ありがとう！ ほんとうにありがとう！」

「すごいじゃないか岸田くん！」

「昔ソフトやってたの？」

「いえ、ずっと帰宅部でした」

岸田はぶっきらぼうに答え、祝勝会にも出ずさっさと帰ってしまった。

*

勘違いしてはならないのは、このソフトボール大会、盛り上がったのはおれたち製造部だけで、ほかの部署からしてみればクソ面白くない結果だったということである。一点も取れずにホームランを浴びるだけの試合なんて、面白いはずがない。ソフトボール大会は、組合の企画者たちが岸田という怪物を見抜くことができなかったために、久々に失敗に終わったのだ。企画者たちは組合の上層部に必死で謝ったが、だめだった。もう組合内部で

の出世がなくなってしまったのだ。すると案の定、岸田を逆恨みする者が出てきた。組合をこよなく愛していたシステム管理部の下柳である。下柳はソフトボール大会以前の小さなイベントも先頭に立って仕切っていたし、休日にデモ行進に呼ばれば必ず加わって大声を張り上げたし、寄付金を募られれば誰よりも多く出したし、組合の集会が開かれると聞けば仕事をほっぽりだして参加した。ゆえに、職場での評価は最低だった。もう彼は組合の道しか見えていなかったのだ。

「てめえ、人の人生めっちゃめちゃにして楽しいのかよ！！」

下柳はわざわざおれたちの職場までやってきてわめき散らした。すぐわめき散らすので有名なのだ。システム関係の障害を連絡しても、「マニュアルを読んでください、そこに載っていないことは一つもありません」と冷たい対応を繰り返して、「実際に載っていないから聞いてるんだ！」と怒っても「載ってないようなことあちらもわかりませんねえ！」などと逆ギレする、つまりシステム管理部としての仕事を放棄しているも同然なのだった。そこには組合以外のことに時間を割きたくない、という思いが見え隠れする。常時そんな様子だったから、彼が電話に出たらすぐに切り、別の社員が出るまでかけ直す者もいるほどだったのである。岸田は下柳の怒声をはじめ無視していたが、あまりにうるさいのでうるざりしたのか、ラインから首だけ振り返って言った。

「ソ、フ、ト、ボ、ー、ル、大、会、く、ら、い、で、め、ち、や、め、ち、や、に、な、る、よ、う、な、人、生、や、め、ち、ま、え、よ」

下柳はプチ切れて岸田につかみかろうとしたが、岸田がよけるとバランスを崩してこけてしまった。そして岸田の横にある巨大なスクラップマシンに右腕を巻き込まれ、頭を巻き込まれ、胸を巻き込まれ、結局全身を巻き込まれた。バキバキと骨の碎かれる音と断末魔の悲鳴が響き渡ったが、おれにはそれが人間の生々しい最期の音ではなく、出来の悪いテクノポップみたいなのをべらべらの電子音に聞こえた。結局誰も下柳に手を差し伸べなかった。人に差し伸べる手の余っている人間なんてここにはいない。

「ほんとにやめることないだろ」

岸田がつぶやいた。おれたちは笑った。岸田もクスクス笑った。静かな、そしてどこか陰湿さを含んだ笑い声が、長いあいだ工場に響いていた。

*

少し仕事に慣れた頃、おれに近寄ってくる女もちらほら現れた。お金なんてまったくないよ、と言ったら全部おごってくれる女もいた。最初はなぜこんなことになるのかわからなかったが、よくよく話してみれば、みんな「元シャドウボーイズの塚原さんですよ

ね!？」と目を輝かせるのだった。おれが元シャドウボーイズの塚原かどうかと聞かれればそうなのだが、もうとくに脱退したグループだし、元々シャドウボーイズだったからといって寄ってこられても、そんなにうれしくはなかった。シャドウボーイズというのは今でも人気のある四人組の男性アイドルユニットなのだが、元々はおれも入っていて五人組だった。十四歳のときに飲酒と喫煙がばれて、くびになったのだ。あれは大失敗だった。シャドウボーイズのメンバーの年収は、事務所に相当絞り取られるとは言え、少なくとも手取りで三千万を越えている。おれもあのまま歌って踊っていれば、手取りで年間三千万もらえていたのだ。それがいまや、手取り十萬サービス残業さんまいでボーナスなし、つまり年間百二十万である。でも、おれはあのとき酒を飲みたかったし煙草も吸いたかった。たぶん、何度人生をやり直してもあのタイミングで酒を飲んで煙草を吸うと思う。だからそんなに強く後悔しているわけではない。ただ、三千万の可能性が残されていた時代があった、という事実を懐かしく思い出すだけだ。

おれに寄ってくるシャドウボーイズのファンは大抵復帰してはどうかという話を持ちかけてくる。以下はその平均的な内容である。

「塚原さんがいたときの方がシャドウボーイズはきらきらしましたよ、今はなんだか落ち着いてしまってるっていうか、停滞してるっていうか。塚原さんってほんとどセンター

にいたじゃないですか、やっぱりその穴を埋めるのって、塚原さん本人にしか無理なんじゃないかなって思うんです。私でなければいくらでもお手伝いします、私、塚原さんの支えになって、シャドウボーイズの本当の復活を塚原さんの横で見たいんです！」

ああそう、でもね、おれはシャドウボーイズなんてもうどうでもいいの、クソみたいな曲、クソみたいな歌詞、クソみたいなダンス、クソみたいな先輩にクソみたいな同期にクソみたいな後輩、もう二度とあんな世界に戻りたくないし、シャドウボーイズのメンバーが全員性病でちんちん腫らして死んだって涙の一滴も出やしないよ。

おれはそう言いたいのをぐっとこらえて、「そうだな、そうなればいいなっておれも思うよ」なんて心にもないことを言う。もちろん、磨き上げた催眠のわざを適切なタイミングで使いながらである。こういうバカな女からは金を絞れるだけ絞らなきゃいけない。なんたっておれの稼げる金は年に百二十万しかないのだ。

*

同期の野上という男は、稼いだ少ない金をほとんどすべて風俗につきこみ、愛のなんたるかを真剣に考えていた。野上は性行為を愛の中心にすえていて、できた恋人との性交時

には必ず一時間たっぷり前戯をし、「お願いします、おちんぼ挿れてください、もう我慢できません！」と叫ぶまで決して挿れないという変態ぶりだった。「お願いします、おちんぼ挿れてください、もう我慢できません！」って叫ばせる意味は何なの？ とおれは聞いたことがある。すると野上は腕を組んで言った。

「逆に聞くが、お願いします、おちんぼ挿れてください、もう我慢できません！ と叫ばせない意味はあるのか？」

おれはそれで野上が答えを持ち合わせていないことを確信した。野上はいつも答えを持ち合わせていない質問をされると「逆に聞くが」と言って逆に聞いてくる。それは野上得意のカウンターパンチなのだがあまりカウンターになっていなくて、「いやいや、何かをやらせないことに意味はなくても、やらせることには意味があるだろ？ なんだっていちちやらせてんだからさ、お前の方に意味を説明する責任があるし、おれの方にはないね」と追い詰めると、野上はすぐ怒って帰ってしまう。だからみんな、野上なりのカウンターがきたな、と感じたら「うーん、難しいところだね」とかなんとか言ってさっさと受け流すことにしている。なかなか面倒なやつなのだ。

だが愛のなんたるかを真剣に考えているというのは本当らしく、風俗に行っては電車のつり革痴漢プレイに没頭したり女の子の全身を一時間かけて舐め尽くしたり高い金を払っ

てアナルファックやフィストファックやスカトロプレイに挑戦したりゲロを吐かせてそれをビチャビチャ飲んだり、あらゆる方法で愛へのアプローチを試みているのだ。全部野上のハタリじゃないかという疑惑が持ち上がったこともあったが、それはすぐに解消された。野上は自分の風俗でのプレイをすべて隠し撮りしていたのである。スマートフォンを鞆の中でうまい具合に配置したり、プレイルームの作りによっては柵にさりげなく立てかけたりして、マジで全部撮っているのだ。おれも何度か見せてもらったが、さすがにゲロをビチャビチャ飲んでいる動画や、いくつかのひどいスカトロものは最後まで見通すことができなかった。

野上はこういう極端な行為によって愛を検証しているわけなのだが、恋人ができて第一段階「お願いします、おちんば挿れてください、もう我慢できません！」の時点で全員脱落するらしい。そりやおれが彼女でも脱落するよ、もっとフツーにできないのかよ、恋人って風俗嬢じゃないんだぜ、とみんなでアドバイスしたこともあったが、野上は「恋人だからとか風俗嬢だからとか、そんなことで対応を変えるのは愛に理解のない人間のすることだ」とぷりぷり怒って帰ってしまった。

面倒なやつだけど、おれはそんなに嫌いじゃない。

*

三年目になると、おれは主任と呼ばれるようになった。ペーペーの称号「主事」とはオサラバ、昇進ってやつだ。しかし、何か難しい昇進試験を通ったわけでもない。ただ三年目になれば自動的に主任になるというのがこの会社の仕組みなのだ。ごく一部、明らかな問題がある社員を除いてだが。

ある日、主任であるおれと、明らかな問題があると判断された岸田主事が夜勤当番でたらだら仕事していると、ニューヨーク・ Yankees のスカウトマンがやってきた。岸田に二百億で Yankees と契約してほしいというのだ。しかし岸田はガン無視で仕事を続けていて、アメリカからはるばるやって来たスカウトマンがあまりにもかわいそうだったので、おれが本人の代わりに丁重に断ってやった。

「岸田がうまいのはソフトボールであって野球ではないんですよ、せっかく来ていただきたい申し訳ありませんが、どうぞお引き取りください」

しかしそのスカウトマンは食い下がり、

「先日そのむらはちぶ公園でピッチングをする岸田を見た、草野球か何かの試合だったと思うが、ストレートは170キロ出ていたし、変化球も実に多彩で、誰一人バットをか

済めることさえできなかった、そしてバッティングも大変すばらしかった、全打席ホームランだった、ピッチャーとしてもバッターとしても、彼は超一流の選手としてメジャーでも十分通用する、いや、メジャーで天下を取れる逸材なんだ、二百億でも安いくらいだよ」

などというようなことを隣の通訳に言わせて引き下がらなかった。

「リアリィ？」

おれは岸田にふざけて英語で聞いてみた。

「ストリートなら180キロは出てたはずだ、そいつは嘘をついてるよ」

岸田は手元の仕事から一切目をそらさず言った。おれは腰を抜かして岸田に熱くメジャー行きをすすめたが、マジでうっとろしそうだったのでそれ以上何も言わないことにした。アメリカから来たスカウトマンは諦め切れない様子で隣の通訳にごちゃごちゃしゃべらせていたが、岸田は無視し続け、最後に言った。

「あなた、日本人を獲得したいなら、ご自身で日本語を話されてはどうです？」

*

岸田の気持ちはわからないでもない。岸田が仮にメジャーリーグで無敵になれるぐらい野球の才能に恵まれていて、使い切れないほどの富を手に入れられるのだとしても、岸田が野球を好きじゃなければ、それを仕事にするのは辛いだろう。岸田はソフトボールも野球も全然好きじゃない。たまに草野球で投げられればそれでいいのだそう。練習なんか一切しない。したことがない。そもそも、岸田は野球選手が何億もの年俸をもらっていることに懐疑的だ。ただ球を投げて打つ見世物に人々が熱狂しているのは、何かのうさんくさい宗教みたいなものだと思っている。そんな認識の男が毎日野球なんてやらされたら、一週間も持たずに発狂しかねない。ある分野で圧倒的な才能を持っていても、その分野に参入するかどうかは当人の自由なのだ。

*

仕事の朝、おれはまあまあ長いあいだ電車に乗る。通勤ラッシュで確実に座れないので、おれは一番後ろの車両の、壁にもたれられる端っこの争奪戦に二年以上毎日参加して、今では大体勝てるようになっていた。仮にしょっぱなで壁を逃したとしても、一駅で降りていく高校生が三人ほどいるので、そいつらをハイエナ戦法で狙えば体をくると入れ替え

て壁を手に入れることができる。そこにもたれて音楽を聴きながら本を読む。これからクソくだらない仕事が始まるっていう憂鬱極まりない時間、せめて仕事以外のことでぎりぎりまで気を紛らわせたかったのだ。

三年目の六月のことだった。おれはいつものように壁にもたれて、くるくる絡まったコードを直してもせず安物の真っ赤なイヤフォンを耳に突っ込んで、黒のブックカバーをかけた本を読んでいた。そのとき読んでいたのは『美熟女肛門マンション』。マンションの管理人がマスターキーや監視カメラを悪用しまくり、マンションの部屋に住む美熟女たちの弱みを握っては次々にアナルを開発し性奴隷にしてい、という芥川賞ものの作品だった。おれが勃起してしまわないよう精神を巧みに統御しながら本を読み進めていると、二駅目で見慣れない女の子が乗り込んできた。気の強そうな目をしていて、つんと尖った鼻をしていて、とても小さく上品なお口をなさっていた。本人は自分がエッチな目で見られることを相当嫌悪しそうな雰囲気、満員電車でおじさんの手が少しでも触れようものなら、必要以上に身体を離して「チッ」と舌打ちでもしそうな感じである。しかし残念ながら彼女の大きな胸とタイトなスカートをばつばつに張らせているぷりぷりのお尻は恐らく本人の希望とは真逆に性的な魅力マックスだった。彼女はおれの目の前に空いていたスペースに、おれに背中を向ける形で体を入れ、おれと同じように耳にイヤフォンを突っ込

み、何やら赤いブックカバーをかけた本を鞆から取り出して読み始めた。豊かな茶色の髪の毛を編み込んで後ろでまとめていて、黒のブラウスからのぞく背中の中の白い肌は毛穴が一つも見えないほどなめらかだった。その朝から、彼女は毎日おれのいる車両に乗り込んでくるようになった。いつもおれは自分が気付かないうちに彼女のことをじっと見つめていて、彼女が不審がっていないか不安になるのだが、彼女の方はおれのことなんて全然認識していなくて、いや、電車に乗っている人間を誰一人まともな存在とは認めていないぞ、というようなたたずまいで、イヤフォンから流れ出る音楽と、赤のブックカバーにつつまれた何らかの本が創り出す世界に没入しているのだった。彼女にとってこの電車は現実世界ではない。その考えはおれを少しずつ安心させ、ほどなくゆっくりと余裕を持って彼女を観察することができるようになった。おれの耳元では常に音楽が鳴っていたし、手元には常に本があったが、彼女との出会いから——もっとも、出会ったと思っているのはおればかりなのだが——、おれの中には何の音楽も文字も入ってこなくなり、ただ彼女の太い編み目をつくるつやつやした髪や上質なミルクの匂いのしそうな背中の中の白い肌や小鳥のようなキスを想像させるかわいい唇を毎日毎日見つめているのだった。

おれと彼女の降りる駅は同じ終点だったが、降りてからおれがさらに地下鉄に乗り換えるのに対して、彼女の方は駅の出口へと向かってしまうので、いつもその先の足取りはわ

佐川恭一（さがわ・きょういち）

滋賀県生まれ。京都大学文学部卒業。『踊る阿呆』で第二回阿波しらさぎ文学賞受賞。著書に『サークルクラッシュア麻紀』、『受賞第一作』（破滅派、電子書籍）、『ダムヤーク』（RANGAI文庫）、『舞踏会』（書肆侃侃房）などがある。

アドルムコ会全史

二〇二二年四月二日 初版第一刷発行

著者——佐川恭一
発行者——友田とん
発行所——代わりに読む人

東京都目黒区中央町一—一四—一—二〇二
Email: contact@kawarinijomuhito.com
Web: <https://www.kawarinijomuhito.com>

装画——斎藤潤一郎
ブックデザイン——コバヤシタケシ
組版——飯村大樹
校正——東京出版サービスセンター
ロジデザイン——佐貫絢郁
印刷製本——シナノ印刷株式会社

乱丁・落丁本はご面倒ですが当方までお送りください。
送料当方負担にてお取り替えいたします。
ご意見・ご感想などは contact@kawarinijomuhito.com までお寄せください。
今後の出版活動の参考にさせていただきます。

© Kyoichi Sagawa 2022, Printed in Japan
ISBN 978-4-9910743-4-9 C0093

